

情報処理学会平成11年度功績賞

(会員番号順)



中 田 育 男 君

なかた いくお
(昭和10年3月10日生)

中田育男君は、永年にわたってプログラミング言語処理技術の研究開発に携わってこられ、数々の優れた業績を挙げられました。

すなわち、我が国において、黎明期にあった商用計算機のコンパイラ開発（HIPAC103, HITAC5020のFORTRANコンパイラ）の先駆的業績をはじめとして、その後のコンピュータアーキテクチャの進展に対応したコンパイラの最適化技術、仮想記憶機能を付加したマシンで会話型システムを実現するためのシステム記述言語開発などプログラミング言語処理分野で多大な業績をあげられ、今日の情報化時代の基盤確立に貢献されました。

1979年から1997年の筑波大学電子・情報工学教授、その後現在に至る図書館情報大学における研究教育活動やコンパイラに関する多数の著作活動等を通じて、情報処理分野における多くの優れた人材育成に多大な貢献をされました。

また、1991年から筑波大学の物理学系、電子情報工学系、構造工学系共同での超並列計算機開発プロジェクトCP-PACS（Computational Physics by Parallel Array Computer System）では、コンパイラの開発を指導され、1996年のマシン完成時にLINPACKベンチマークで368.2ギガFLOPSの世界最高性能達成に貢献されました。

以上に加えて、本学会の理事を2期4年間務められ、本学会の発展に尽力されるなど、我が国の情報処理分野の発展に尽くされた功績は誠に顕著なものがあります。



戸 田 巖 君

と だ いわお
(昭和9年2月1日生)

戸田巖君は、永年にわたってコンピュータシステム、コンピュータネットワークの研究開発に携わってこられ、数々の優れた業績をあげられました。

すなわち、日本電信電話公社においてDIPS計算機のアーキテクチャ、オペレーティングシステムの開発に従事され、日本独自の先進的なコンピュータシステムとして完成させました。この計算機はオンラインシステムとして広く利用され、このシステムの稼働により日本のコンピュータ設計技術が世界的に大きな評価をされるようになりました。

さらに、今日の情報化時代を支えるコンピュータネットワーク技術、人工知能技術についても、日本の黎明期の時代から学界、官界、産業界を指導し、人材の育成に努め、日本の先進的技術を世界に示すとともに、日本の情報処理技術レベルの向上に大きく貢献されました。

また、本学会の会長、副会長、理事を歴任され、会誌、論文誌、研究会、学会事務全般にわたり、新しい学会としての進むべき方針を明確にされ、学会の変革に大きく寄与されました。さらに日本学術会議会員、人工知能学会等他学会の役員あるいは国の審議会・委員会委員を多数歴任され、多くの成果をあげられました。

このように、我が国の情報処理分野の発展に尽くされた功績は誠に顕著であります。



池田 克夫 君

いけだ かつお

(昭和12年10月11日生)

池田克夫君は、永年にわたって、情報処理の幅広い分野、すなわち、コンピュータシステムの構成、オペレーティングシステムの構造、コンピュータネットワークの構成、手書き文字認識、画像理解、知能情報メディアの構築等において研究に従事されました。

筑波大学においては光ファイバを用いて世界最高速の学内LANを構築し、異機種の大規模コンピュータによる大規模LANを実用化されました。京都大学においては工学部および同附属高度情報開発実験施設において先進的な計算機利用法について研究され、京都大学におけるコンピュータとネットワーク利用環境の整備に大きく貢献されました。また、工学部においては、創設期の情報工学科の実験実習カリキュラムを策定、実施され、以後全国の情報関連学科においてモデル的な実験実習カリキュラムとして高く評価されました。さらに、大学院情報学研究科の設置に尽力し初代の研究科長として新しい情報学の学域の確立を目指されるなど、一貫して情報処理の分野の人材育成にも傾注されました。

本会においては理事をはじめ、論文誌編集委員長として論文誌のTeX投稿と購読料改定による経理改善、情報処理教育カリキュラム調査委員会委員長としてJ95の策定の組織化に貢献されました。また、全国大会委員長としてデモセッション設置とCD-ROMによる論文集発行方式の導入、規格調査会SC18専門委員会委員長・ISO/IEC JTC1 SC18委員として文書処理と関連通信の標準化推進に貢献されました。さらに、国の審議会・委員会委員、日本規格協会・大阪科学技術センター等の各種委員会委員・委員長等を歴任され、我が国の情報処理分野の発展に尽くされた功績は誠に顕著であります。



山田 尚勇 君

やまだ ひさお

(昭和5年6月8日生)

山田尚勇君は、永年にわたって、情報処理の幅広い分野で先駆的な研究に従事されました。ペンシルバニア大学に至る米国時代は、「McNaughton-山田アルゴリズム」、「計算可能関数に関する実時間計算量の解析」を始め、オートマトン理論と数理言語学における世界的に著名な数々の先駆的業績をあげておられます。東京大学理学部情報科学教授に迎えられてより、オートマトン理論と数理言語学に加えて、自然言語、認知科学、ヒューマン・インタフェース等の分野においても独創的な数多くの功績をあげておられます。特に、Tコード（ブラインドタッチ方式の日本語入力法）の研究は日本中に大きなインパクトを与えました。東京大学と学術情報センターにおいては後進の育成にも尽力され、多くの門下生が我が国のみならず世界各地で情報処理分野の第一線において活躍しています。

学術情報センター教授として迎えられてからは、研究開発部長と企画調整官（副所長）を併任され、センター内の研究者を統括する立場で国際的視野を活かし学術情報データベースやネットワークに関する共同研究を推進するとともに、研究成果を学術情報基盤の上で活用するための活動に尽力されました。この間も認知科学に関する研究において優れた業績を残され、同時に東京大学大学院理学系研究科教授も併任されて学生の指導に尽力されました。学術情報センター退官後は中京大学情報科学部教授として迎えられ、引き続き教育に力を注いでおられます。

一方、本学会の理事・監事・各種委員、本学会と関係の深いACM日本支部の初代支部長などを歴任され、学会ひいては我が国の情報処理分野の発展に尽くされました。特筆すべきは、本学会のテクニカルコミュニケーション研究グループの主査として、同研究グループの活動に尽力し、同研究グループより発展的にデジタルドキュメント（DD）研究会を発足させられたことです。これらの研究会の発展については自然言語やヒューマンインタフェース分野における深い造詣に負うところが大きく、2年間の初代主査の間にDD研究会活動の基礎を固められました。

以上のように、我が国の情報処理分野の発展に尽くされた功績は誠に顕著であります。